

河内における県の展開

若 井 敏 明

はじめに

もう十年ほどの昔、私は「国県制の成立」という小編を著して、大化前代の地方組織である国と県についていささか考えを述べたことがある。^①そこでは、国造制の成立を六世紀や七世紀にもとめる見解を批判し、『古事記』や『日本書紀』が伝える成務天皇代（天皇号、漢風諡号ともに後世のものであるが、本稿では便宜上人名として使用する）での国や県の設定を、肯定的に見直すべきであると論じた。

ただし、それは制度の総体について概観したにとどまり、国と県の変遷について具体的に考えることはな

かった。制度は成立段階から静止しているものではなく、その実態には変遷がみられるはずである。したがって、国県制についても、動態的な視点から考えていく必要がある。本稿はかかる関心から、畿内とくに広義の河内地方での国と県のありかたについて考えてみたものである。何分、史料が限られているから、推測にたよることが多くなると思うが、ご批判賜れば幸いである。

一 県にみる二形態

大化前代の社会では、地方行政組織として国と県が

設定され、国には国造、県には県主や稲置とよばれる官が置かれた。両者の関係については議論があるが、私は「軍尼一百二十人あり、なお中国の牧宰のごとし。八十戸に一伊尼翼を置く、今の里長の如きなり。十伊尼翼は一軍尼に属す」という『隋書倭国伝』の記載などからみて、国のもとに県が置かれたとみてよいと考えている。伊尼翼は県を治めた稲置の音写であろう。ただし、一国の戸数が十伊尼翼つまり八百戸というのは少なすぎるので、国全体が県に分割されていたのではなく、国の領域のなかの一部に県が置かれているような状態であったと思われる。つまり、国造の支配領域のなかに県が散在していたという形態であって、県主の支配していない地域が国造の直接支配地であったというわけである。

さて、国と県とはいかなる性格をもっていたのであろうか。この点について原秀三郎氏は『先代旧事本紀』の説を引いて、「国造とは神武東征に従軍し、功のあったもの、県主はこれに抵抗した一族のうち帰順したものと位置づけられている」と述べ、県主につい

て「帰順した土着勢力が王権の直轄領に編入され、（中略）王宮経済への貢納義務を負った」と論じている。^②この指摘は、大和国では神武天皇による征服にさいて、帰順した先住勢力が磯城県主や猛田県主に任じられており、九州でも同様に、大和政権に服属した土着の豪族が岡県主や怡土県主となっているというありかたからみて首肯できる見解であると思われる。

また、従来から指摘があるように、『延喜式』の祝詞（祈年祭、月次祭）に大和の六の御県について「この六つの御県に生ひ出づる甘菜・辛菜を持ち参る来て、皇御孫の命の長御膳と聞しめす」とあるように、大和の県からは天皇への食材が貢納されていた。このように県とは、朝廷に種々の物品を貢納していたのである。ただし、三島県主から土地を献上させて直轄地の屯倉（竹村屯倉）を設定していることからみて（安閑紀、後述）、県を王権の直轄領と解する見解にはしたがえない。当初は、大和王権に服属した先住の土着氏族が旧来の支配地を県主に任じられて認めてもらう、いわば本領安堵のみかえりとして、大王や朝廷に資材を奉

ることになったのであろう。その際、その支配地が県と呼ばれたのである。

しかし、県主がこのような先住勢力の末裔のみであったとはいえない。後世になって、新たに県が設定されたこともあった。その例が応神朝における吉備での県の設定である。『日本書紀』応神二十二年九月庚寅条によれば、吉備に行幸した応神天皇は吉備臣の祖、御友別とその兄弟子孫から歓待を受けたことを喜び、「吉備国を割きて、その子等に封」じたが、そのとき設定されたのが、川嶋、上道、三野、波区芸、苑の諸県であった。おそらく、吉備はこの時期までは県がつかれず、国造のみが支配する地域であったが、このときあらたに県が設定され、御友別の子弟が県主ないし稲置に任じられたのであろう。

このようにみると、県を単純にある時期、一律に設定されたものとはいえないのであつて、そこには新旧の二形態があることが判明する。ところで、従来も県に新旧二種類の形態を認める見解があつた。しかし、それは県をアガタとコホリに区別し、国の下級行政区

画としてのコホリとしての県を七世紀ごろに設置されたとみるものであつて、本稿とは視点がことなつて^③いる。ちなみに私は、県は一貫してひとつであり、基本的にアガタと呼んでよいと考える。

さきにみたように、県とは、大和王権に帰順した一族が県主として支配を認められた地域で、かれらはその地から朝廷に種々の物品を貢納していたのであるが、いったんこのような形態が定着すると、県はたんに朝廷に資材を貢納する機構として把握されるようになる。そこで朝廷は、土着勢力とはかわりなく、朝廷への物品確保のためにあらたに県を設定することとなり、ここに新型の県が生まれることとなつたと思われる。

このような県の二形態は、もつともはやく県が設定されたと思われる大和の場合にもいえる。神武紀には神武の大和平定のあと大和におかれた県主として、猛田県主と磯城県主が記されている。さらに初期の天皇の後妃を出した氏族として、磯城県主、春日県主、十市県主が記されている。ところが、祈年祭や月次祭の祝詞などにいわゆる大和の六御県として伝えられてい

るのは、高市、葛木、十市、志貴、山辺、曾布の六箇所であつて、猛田県や春日県はみえなくなり、あらたに高市、葛木、山辺、曾布の諸県が加わつてゐる。ここからおそらく、猛田県や春日県はいつのころか廃され、またあらたに高市、葛木、山辺、曾布の諸県が設定されたと考えられるのである。

このうち、高市や山辺、曾布の諸県が新しい県であることは、県主の系統からいえる。つまり『新撰姓氏録』によれば、高市氏は天照大神の子神、天津彦根命の三世の孫、彦伊賀津命の後裔とされ、山辺氏は和氣氏と同祖で、垂仁の子、鐸石別命の後裔という。また添県主は津速魂命の子、武乳遺命の後裔とあるが、中臣氏や藤原氏の祖である天兒屋根命が津速魂命の三世の孫だというから、中臣氏など関係の深い氏族であるらしい。このようにみれば、これらの氏族は先住氏族とは考えられないのである。また、葛木（葛城）県は当初は葛城国で国造が置かれていたから（神武紀）、ここでは国から県への格下げがおこなわれたことになる。ちなみに、『日本書紀』允恭二年二月己酉

条の忍坂大中姫の立后記事には、かつて大中姫に無礼なふるまいがあつた鬬鷄国造の姓を貶して稻置としたという逸話が載つてゐる。稻置は県に置かれた官職であるから、大和地方での国から県への格下げは鬬鷄（都祁）でもおこなわれたのである。

このようにみると、大和国では県の改廃や国の県への格下げなど、いわば県の再編がおこなわれたことがあきらかである。このうち、都祁が国から県に格下げされたのは允恭朝のことと推測されるが、それ以外の再編もこの時期なのかは判然とはしない。山辺氏が、垂仁天皇の子、鐸石別命の後裔だというから、すくなくとも垂仁朝以降だと考えられるだけである。しかし、国県制を考えるには、このような視点はかかせない。その点をふまえて河内における県の実態を考えてみたい。

二 河内における県と開発

河内地方の県については、すでに吉田晶氏のすぐれ

た研究がある^④。それによれば、広義の河内地方、のちの摂河泉には、三島県、志紀県、三野県、紺口県、茅渟県、猪名県の六つの県が確認できるといふ。それらの所在地は、三島県はのちの摂津国嶋上・嶋下郡、いまの高槻・茨木市一帯であり、志紀県はのちの河内国志紀郡、藤井寺市道明寺を中心とした一帯、紺口県は石川の中・上流、河内国石川郡と錦織郡のあたり、三野県は河内国若江郡、いまの八尾市北東部から東大阪市南東部一帯、茅渟県は和泉国とくにその和泉郡のあたり、猪名県は猪名川流域の摂津国河辺・豊島郡一帯という。

このうち猪名県には相当する県主の氏族がみあたらず、はやくに没落したとされる^⑤。そこで猪名県についてはのちに触れることとして、それ以外の県についてその県主と思われる氏族の由緒を『新撰姓氏録』によってみてみると、そこにも前節でみた新旧の別があることに気づく。

まず新しいタイプに属すると思われる県は、志紀県、紺口県、茅渟県である。このうち、志紀県と紺口県の

県主はともに神武の子、神八井耳命の後裔という。また珍県主は崇神天皇の皇子、豊城入彦の三世の孫、御諸別の後裔とあり、ともに王族出身であるから先住氏族とはいいがたい。このように河内地方は新しいタイプの県が多くを占めているといえるが、それにはいて、古いタイプに属すると思われるのが三島と三野の県である。

三島については、まず神武天皇の妃の出自の問題がある。神武天皇の妃については『記紀』でやや相違があるが、いずれも三島溝杭の娘に事代主神が通つて生まれた娘であるという伝えは共通している。問題はこの三島がどこかということである。すでに式内社として摂津の三島に溝杭神社が鎮座しており、これを現在の摂津の三島とみる見方もあるが、私は初期の天皇の後妃がそろって大和地方の豪族の出であることから、この三島もまた大和に求めるべきであつて、摂津の三島とは考えられない。なによりも、三島県主は『先代旧事本紀』では天神玉命を祖とするとされ、『新撰姓氏録』ではその後裔の三島宿禰について「神魂命十六

世孫 建日穗命之後」とみえる氏族なのであつて、事代主神などとは関係をもたない。このことから、三島溝杭は三島県主とは無関係であらう。⁽⁶⁾

さて、三島県主が文獻上に現れるのは『日本書紀』安閑元年閏十二月壬午条の「県主飯粒」が最初である。しかし、三島県主の奥津城と思われる奈佐原古墳群がすでに古墳時代前期から造営されている状況からみて、古くから三島を支配していたとみてよい。⁽⁷⁾

このことは、三島県主の出自からもいえる。すでに述べたように三島県主の祖は、天神玉命ないしは神魂命十六世孫の建日穗命である。ここでみえる天神玉命と神魂命とはおそらく同一の神であらう。また、三野県主は『新撰姓氏録』によれば「角凝魂命四世孫、天湯川田奈命」の後裔とされるが、角凝魂命は神魂命の子神であつて、三野県主も神魂命を祖としている。このように考えれば、河内地方は当初、三島と三野の二つの県が設置されるにとどまっていたとみられよう。そして、この二つの県の県主はともに神魂命を祖とする氏族であつたのである。

ここで注目されるのが、かれらが葛野の鴨および賀茂の県主と同祖だということである。つまり、鴨、賀茂の両県主は『新撰姓氏録』に「神魂命孫、鴨建津之身命」を祖とする氏族で、また『先代旧事本紀』でも天神魂命が祖であるとみえる。ここでも神魂命と天神魂命は同一の神で、三島と三野の県主の祖である天神玉命と神魂命と一致するのである。このようにみると、大和政権の勢力がおよぶ以前に山城盆地から三島、河内湖南岸にかけて、神魂命を祖とする集団が盤踞していたわけである。では、かれらはどのようにしてこの地域を治めるにいたつたのか。

その点で注目されるのが『釈日本紀』が引用する「山城国風土記」の記載である。

可茂と称ふは、日向の曾の峯に天降り坐しし神、賀茂の建角身命、神倭石余比古の御前に立ち坐して、大倭の葛木山の峯に宿りまし、漸に遷りて、山代の国の岡田の賀茂に至りたまひ、山代河の隨に下り坐して、葛野河と賀茂河の会ふ所に至り坐し（略）その川より上り坐して、久我の国の北の

山基に定り坐しき。

ここで「賀茂の建角身命」というのは、いわゆるヤタガラスのことで、神武天皇に同行して大和に至り、風土記によれば、それから葛木山の峯、山城の岡田の賀茂から山代河（木津川）を下って、葛野川と賀茂川の合流地点に至り、さらに賀茂川をさかのぼったという。問題は、ここで葛木山の峯とあるのが、地理的にみてやや不自然なことであるが、向日神社が所蔵する「向日二所社御鎮座記」という文献には「葛木の峯」が「宇陀県」となっている。⁽⁸⁾宇陀には現在も八咫鳥神社が鎮座しており、神武天皇大和平定の経路からみてもそのほうが順当である。「葛木の峯」は葛城にも鴨氏がいるので、それと混同したのではあるまいか。⁽⁹⁾

そして、三島県主も鴨、賀茂の両県主と同祖であることからみて、かれらもまた同様にこの経路をたどったとは考えられないであろうか。つまり、神武天皇の大和平定にしたがつた集団が、宇陀から南山城に進出し、さらに木津川に沿って北上、一部は山城盆地へ、一部は淀川ぞいに三島に定着したという経路が想定で

きるのではないかということである。そして、さらに一部は淀川左岸から南下して河内湖の南に定着し、三野県主となったのであろう。そのうち河内湖南部の勢力はもつと以前から居住していた可能性もあるが、このあたりには神武以前はニギハヤヒノミコトを祭る、のちの物部氏系の集団が居住していたと思われ、やはり神武東征によつてその勢力が後退したあと、三野県主の勢力が浸透したとみるほうが蓋然性がたかい。

これら神魂命を祖とする集団が山城から河内へと勢力を伸ばしていく時期は、おそらく神武天皇に始まる大和政権が大和盆地にその支配を拡大していたころと平行すると思われる。やがて山城、河内へと大和政権の支配が拡大するにしたがつて、これらの集団はその支配下に入り、県主に位置づけられていったのであろう。

ところで、ここで注目すべきが、鴨や三島、三野の各県主も属する神魂命を祖とする一族の代表的な氏族として紀氏があることである。神武天皇の大和侵入について、最近主張されている紀の川ルートを勘案すれ

ば、当初、神魂命を祖とする一族が紀の川流域におり、その一部が神武天皇の一行とともに移動して、最終的には山城盆地から三島、河内湖南岸に定着したとは考えられないであろうか。そしてさらに注目すべきことに、鴨県主の祖である建角身命について風土記は「日向の曾の峯に天降り坐しし神」と述べている。つまり、鴨県主はその発祥地を九州だと伝えていたのである。

とすれば、かつて九州から移動した勢力が紀の川流域に定住していたことを示すのであって、事態はすこぶる興味深い。私は、大和政権の成立を考察するのに必要なのは、神武天皇の東征を一概に否定するのではなく、それを相対化する視点であると考えているが、神武以外の九州勢力東漸をあとづけることはそのもっとも重要な作業であろう。

いささか筆がすべったが、それでは、河内地方では県が設置された場所以外はどのように支配されていたのであろうか。私は、河内ははやくから大和政権にとって重要な地域であったから、大和政権はそこに有力王族を配置するという政策をとっていたと思う。

まず崇神朝におきた武埴安彦の反乱に注目したい。この反乱では、武埴安彦が山背から、その妻が大坂から奈良盆地に侵入しようとしており、武埴安彦が大和の外部、河内か山背に根拠をもっていたことがうかがえる。この武埴安彦の母は、河内青玉の娘であったとされ、あるいはその縁で河内に根拠をもっていた可能性があるのではなからうか。

もちろん、これは可能性にとどまり、その実態はあきらかではないが、その後河内地方については、崇神紀六十二年七月丙辰条に「河内の狭山の埴田水少なし。(略) 其れ多に池溝を開りて、民の業を寛めよ」という詔を載せ、十月に依網池、十一月に苅坂池、反折池を造営したとある。そして、十月条に引く「一云」によれば、これら三つの池は天皇が桑間宮に居て造ったものであるという。この一連の記事からみて、これらの池は河内の開発のために造営されたもので、しかも天皇みずからがそれにたずさわったのである。この事業と武埴安彦の反乱との前後関係がたしかではないが、流れとしては、武埴安彦の滅亡後、河内地域は大王み

ずからが出向いておこなうような開発対象となったのではなからうか。

さらに垂仁紀三十五年九月条には、今度は皇子のひとり、五十瓊敷命を遣わして、高石池、茅渟池を造つたとある。しかも、この五十瓊敷命は三十九年十月条によれば、茅渟の菟砥川上宮に居て、劍一千口を製作したとあり、和泉の南部にその宮があったらしい。このようにみれば、河内地方でのため池の造営などによる開発には、天皇や王族がその陣頭指揮をとったことがうかがえるのである。そして、このような王権による開発がおこなわれた地域には古いタイプの県主が確認されず、さらにその後巨大な王墓が築かれることとなるのも注目しておいてよい事実であろう。

このようにみると、大和政権による河内地域の支配形態は、淀川の右岸には三島県主、河内湖の南、旧大和川流域には三野県主があり、これら旧タイプの県主がない地域、つまり南河内、和泉地域を王族が直接開発をすすめるという形態であったと推測できるであろう。このような形態がやがて変化するわけだが、そ

の意味するところについては節を改めて述べよう。

三 県の再編と河内の王権

本来、三島と三野にしか県が設置されていなかった河内地域に、やがて新しいタイプの県がいくつも置かれるようになるのはなぜであろうか。この問題を検討するまえに、さきに考察からはぶいておいた猪名県について触れておきたい。『日本書紀』仁徳三十八年七月条に猪名県の佐伯部が菟餓野（摂津国八田郡）の牡鹿をニエとして献上したという記事がみえる。ここでは、いちおう県から天皇の食材が貢納されたかたちではあるが、鹿は猪名県とはちがう場所で獲得されており、県主からの献上でもない。ここでは県はたんに天皇の食材を確保する職能民の居住地にすぎないのである。このようにみれば、この県が現地の先住氏族の服属によつて設定されたものとはとてもいえないのはあきらかであろう。この佐伯は景行天皇の時代に日本武尊が奉つたものというが、いづごろ猪名県に安置された

かは判然としない。だがいずれにせよ、県はその本来の意味を失つて、たんなる天皇への供御供給地となつてしまつてゐる。私が新しいタイプの県というのは、このような内実をもつものである。さきに私は、県がたんに朝廷に資材を貢納する機構として把握されるようになると、朝廷は、先住氏族とはかわりなく、朝廷への物品確保のためにあらたに県を設定することとなると述べたが、まさにこのような天皇の供御地としての性格しかもたない県の代表例が猪名県なのである。そして、おそらく、河内地方に設置された新しいタイプの県は多かれ少なかれ、このような性格のものであつたと思われる。

では、これらの県が設置されたのはいつごろであらうか。まず志紀県主については、『古事記』雄略天皇段に説話がみえるから、そのころには有力な豪族であつたことはたしかである。また茅渟県については、さきにみたように、垂仁天皇の時代には茅渟には五十瓊敷命が居たので、県が設置されたのはそれ以後と思われるが、じじつ、珍県主は崇神天皇の皇子、豊城入彦の

三世の孫、世代的には仲哀天皇に相当する御諸別の後裔なので、その子孫が珍県主となつたのはそれ以降、神功皇后や応神天皇の時代以後のこととならう。仮定の話だが、もし河内での新しいタイプの県がほぼ一斉に設置されたとすれば、それは応神天皇から雄略天皇の間ごろということにならう。

このような見方で大過なしとすれば、非常に大雑把なこととなるが、河内地域において本来県を設置していなかつた地域は、王権による開発の進展をふまえ、四世紀末から五世紀ごろにかけて、あらたに王族出身の県主をいただく県が設置されていつたと推定できよう。これらの県を支配したと思われる県主はみな王族なので、それまでの大王や王族による河内開発の推進の延長線上にあるものとみてよいが、この時期に県があらたに設置されたのはいかなる意味があるのであらうか。ここで興味深いのが、この時期から難波が王権にとつて重要な地域として浮上してくることである。つまり、応神天皇が大隅宮、つぎの仁徳天皇が高津宮を営んでいるが、仁徳の場合はおそらく皇子時代から

継続したものであつたろう。とすれば、天皇の供御地という県の性格からみて、おそらく難波に王宮が営まれるにつれて、天皇への食料その他の供給をうながすために、新たにその周辺地域に県が設置されたとみるのが穏当であろう。

ところで、仁徳天皇時代の河内の土地開発については、『日本書紀』に淀川治水のための茨田堤の造営（十一年十月条）、感玖での大溝の造営（十四年条）がみえ、前者は茨田屯倉（十三年九月条）と関連があり、後者はおそらく紺口県の設定にかかわるのであろう。史料上はこれくらいしか見えないが、私はこのころさらに開発の対象として、三島地域が浮上したと思う。三島の開発について記す文献は多くないが、注目すべきが帰化人（渡来人ともいう）の安置である。

『伊予国風土記』の逸文によれば、伊予の御嶋（三島）の神は、難波高津宮御宇天皇つまり仁徳天皇の時代に顕れた神で、百済国から渡り来て「津の国の御嶋に坐しき」という。神だけが渡来するはずはないから、仁徳天皇の時代に百済からの渡来人を三島に安置した

ということであろう。さらに『播磨国風土記』には呉の勝が韓国より来て、始め紀伊国の名草郡の太田村に到り、後に分かれて摂津国三島の賀美（上）郡の太田村に移ったという。これも朝鮮半島からの渡来人を三島に移したことを示しているが、半島からの渡来の動向からみて仁徳朝あたりを想定して大過ないと思われる。この太田の地は、現在継体天皇陵に指定されている太田茶臼山古墳のある一帯で、女瀬川という川をひとつへだてて東に三島県主の墳墓とおぼしき奈佐原古墳群が分布している。とすると、三島県主の領域に接して、渡来人を投入した王権による開発がすめられたいようにみうけられる。そして、南河内や和泉の場合と同様に、王権による開発のあとにつづいて、巨大古墳（太田茶臼山古墳）の造営がはじまるのである。

このように考えれば、三島に継体天皇陵が造営されたのもさして奇異なことではなく、すでに佐紀や百舌鳥、古市につぐ陵墓地帯の候補となっていたとみるべきなのである。ただ実際の継体天皇陵とおぼしき今城塚古墳は女瀬川の東で、三島県主の根拠地に造営され

ているらしいのは注目される。安閑元年閏十二月壬午条では、天皇の三島行幸に際して県主飯粒が合計四十町の土地を献上して竹村屯倉としたとみえ、さらに飯粒の子、鳥樹が大伴金村の僮豎になったとあり、ここに三島県主は大和政權に土地を献上したうえに、大伴氏に臣従するようになったらしい。今城塚古墳の造営はこの県主の動向と無関係ではないであろう。またその行幸自体も陵墓造営に関連すると思われる。

ただし、このときの県主飯粒と大伴金村とのやりとりは、それ以前に屯倉に当てる田の献上を拒んだ大河内直味張に恥をかかせるためにしくまれたヤラセの一幕であった可能性がたかく、それ以前から三島県主は大伴氏に従っていたのかも知れない。この時、大河内直味張は「郡毎に、饌丁春の時に五百丁、秋の時に五百丁を以て、天皇に奉獻」すると約束し、その結果竹村屯倉に「河内県の部曲を以て田部とする」こととなったという。

大河内直味張はこの時期の河内、つまり広義の河内の国造とみてよいであろう。ここで問題となるのは、

文中にみえる郡と県の関係である。それにはふたつの解釈が可能なように思う。まず第一に、ここで国造は郡毎に丁を徴発すると述べている。文脈からみて郡は複数あり、国の下に置かれた単位と思われる。しかしこの時期には郡は存在しないから、結局それは県ということになる。とすれば、国造はその領域内の県から労働力を徴発する権限を有していたことになる。この場合「河内県」とは特定の県ではなく、河内の諸県ということになる。だがこれでは、国の下の県から労働力を徴発しても国造にとつてはさほど負担ではないという疑問がのこる。

もうひとつは、金村が大河内直味張に対して「郡司」に預からせないと脅しているのに注目して、ここでの郡は国造の支配領域を指すと解するのである。そうすると「河内県」とは国造が直接支配している地域ということになる。この場合、広義の河内地方で、国造である大河内氏がじつさいに勢力を延ばした地域はどこであろうか。三島県、志紀県、三野県、紺口県、茅渟県、猪名県などの県、さらに屯倉や王宮などを除

けば、それは六甲山麓の海岸地帯つまり西摂地域ぐらゐのものではなからうか。菟原郡に河内国魂神社が鎮座し、凡（大）河内氏の本拠地であつたと考えられてゐることからみても、「河内県」というのは具体的にはそのあたりではなかつたかと思われる。しかも、のちの山陽道をつかえば、三島地方へは陸路で直結しており、丁の徴発にも都合がよい。ただしこの解釈では「郡毎」という語句がひつかかる。もつとも、潤色を受けてゐる文章では嚴密な解釈もむづかしいといえるかも知れない。一応いまのところは後者の解釈にしたがつておくこととする。

おわりに

以上、本稿では大化前代の地方支配単位である県について、そこに新旧二つのタイプのあることに着眼して、おもに河内地方におけるその変遷を追求した。その結果、政権所在地の変遷などとも連動して、いくぶんかはヴィヴィッドに地方支配の変化が捉えられたの

ではないかと思う。

だが、これはあくまで『記紀』をはじめとする文献を検討した結果であつて、ようは文献の信用度いかににかかつてゐるといつてよい。したがつて、あいもかわらず、本稿にたいしても、それらを積極的に活用したというだけで非難が投げかけられるかも知れない。しかし、何度でもいうが、私は史料批判を名としてじつは史料に立脚しないような研究態度には不信感をぬぐえない。あえて、文献の伝える情報を重視して、河内地域の古代を考えてみたゆえんである。

そこで痛感したのは、県の問題を地方豪族との関係のみで考えるわけにはいかなしいことである。制度としての国県制はおそらくかなりはやくから成立していたであろうが、その具体的な展開については、文献の示すところにしたがつて（そして出来得れば考古学とも連携して）、さまざまありかたを地域に即して追求していくことが大切なのではなからうか。そのことが、停滞してゐるといわれて久しい大化前代の研究を活性化することにつながると思う。

註

- (1) 拙稿「国県制の成立」(横田健一編『日本書紀研究』第二十一冊、塙書房、一九九七年)。
- (2) 原秀三郎「国造・県主制の成立と遠江・駿河・伊豆」(『地域・王権の古代史学』塙書房、二〇〇二年)。
- (3) 井上光貞「国県制の存否について」(『日本古代国家の研究』岩波書店、一九六五年)、原島礼二「県主と稲置」(『日本古代王権の形成』校倉書房、一九七七年)、山尾幸久「大化改新論序説」上・下(『思想』五二九・五三一、一九六八年)など。
- (4) 吉田晶「県および県主——摂・河・泉の中心として——」(『日本古代国家成立史論』東京大学出版会、一九七三年)。
- (5) 長山泰孝「猪名県と為奈真人」(『古代国家と王権』吉川弘文館、一九九二年、初出一九七二年)。
- (6) 拙稿「三輪山の神とその周囲」(大和を歩く会編『古代中世史の探究』法蔵館、二〇〇七年)。
- (7) 吉田晶、注(4)論文。また当該地域の古墳については、森田克行『今城塚と三島古墳群』(同成社、二〇〇六年)を参照。
- (8) 中村修「乙訓(弟国)と久我国」(『古代史の海』五〇、二〇〇七年)。
- (9) 天神系の山代のカモ氏と国神系の葛城のカモ氏が別系統であることは田中卓「葛木のカモと山代のカモ」(『神道史研究』四七一、一九九九年)にくわしい。
- (10) 鳥越憲三郎『大いなる邪馬台国』講談社、一九七五年。
- (11) 宝賀寿男『神武東征』の原像『青垣出版、二〇〇六年。小路田泰直『奈良試論』楽史社、二〇〇七年。
- (12) 田中卓「大化前代の枚岡」(『日本国家の成立と諸氏族』田中卓著作集二、国書刊行会、一九八六年)、吉田晶「凡河内直氏と国造制」(注〔4〕著書所収)。